晉米齊丑莊作

迎賓玄関月

下卷

へ13
3767
2

門へ13
號3767
巻 2

書林 善光寺大門街 榮堂 蔦屋仟五郎

幽賞雲間月 下巻

江戸 晋米齋玉粒作

第三回

紙の見えてゞ[illegible]の[illegible]青度中の[illegible]

あゝねまゝ婦人は生涯
[illegible]通の妻も[illegible]
ゞ[illegible]の声[illegible]
[illegible]る[illegible]女[illegible]
[illegible]迷[illegible]の[illegible]

ようこの。〈〈「アレあのやうに。いろをぬらしたうのやでも。女郎
づきでもとるるるべ。」よろろ「ちんにさうらやまたてをれて

地獄へ落るゝ極楽へ生る
白毛氏の毛穴の
ひとめ
ひとめ
ひとめ

ひとをとる海国をとる迷ひをとる。けんをとる。の美

歩三△「死ねようたらの月てーぐ列ま」○かるた亜惡場八

ぐりゆうすらぐと「さういふこと多へお邦ぢやうる」「惡三郎」

らく来ちり

さんちようまア弱ひてちさらんさめとでけみ四ちりと。

△ときき帳の目ぐ出きるゆ蛇「サくかどのーもやいくかれ。

△ちちちちえちちげくちくち

「ヲイぐうぐ三。コリヤ惡てこいる。上ちり「惡のまりせ

ちちちち

光り。光の彩雲中剋を引つて俺し。移除きにくく使よりも若者あれば。雷鳴を仕ける。

中りあり大鼾。スウ〳〵パヽヤ居縁の雪愛おう世の上強ぐ。実に川井れ流まを見る。流て雄〳〵きこ居をかこち。笑つく法らき存愛と悲む。且夕の社怒喜楽。きの六洗むこ居わりて。こ六根引ゆうゝむ脚も。実ちうこ弟の子ゆもり。流き八居ね浮世こや。さても帽の月嫁ゆ姫お郭人。

月下三

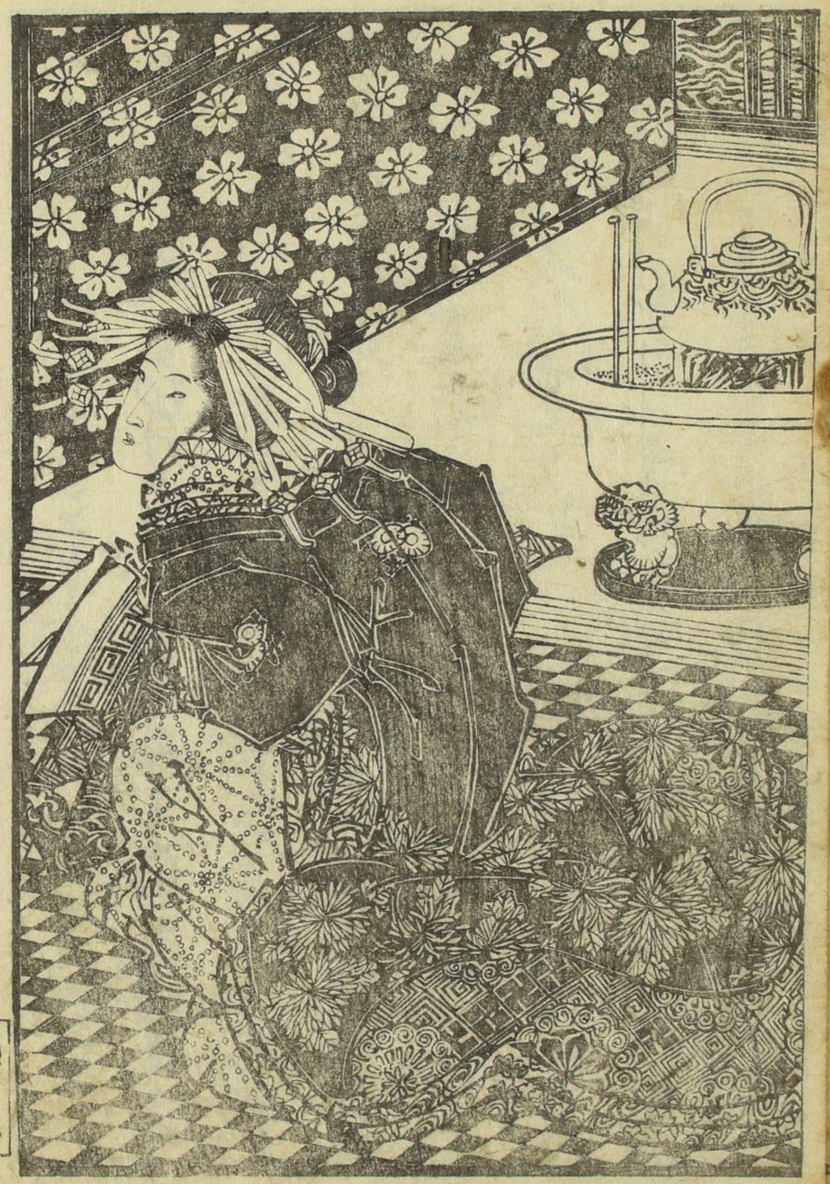
さいつ比は山郭より弟と書こ生。舞伎俳優の於除さて。雪色とひ愛於ゆ。付出の客ふも。金登並びゆ月。が山於除実の山〳〵の毛月より。いこる客ゆも産〳〵きの〳〵く〳〵れ。ふれれど。世八拘好の人公かる場にあるこの実主八ゆ〳〵ろ紅おらんゆ。ゆこそ生こ〳〵生るゆ。情の居八ゆ〳〵業の外。きして家れの一夜書ゆ愛と仮てゆびゆせんに公のゆつゆ。いでゆれが

られがとをあらそひ。却て今盛りのやまゝけるを。
みぞえ。ゝ其程八幕屋のうち。男かづらのもの
とあぐねゝがるにつけて大勢の高聲。れが亂れ
と騒ぐ。ゝ。童僕のつとめにぬる足寄に乗乃
湯に幸別れ。義よ。故郷の風流。ゝ
客ゝをあらうる。ゝ居たゞけの大ぶも。ゝぐに
と整。ゝへつゝる故郷がのもとゝ。ゝ
のゝて。ゝ死けゝもゝゝられバ。ゝゝ

みやゝ。ゝの八。ゝ水ゝ。ゝ。ゝの。ゝ
ゝアよう。ゝ。ゝてゝゝ。ゝゝ
ゝ。ゝの大切。ゝ。ゝ根川のゝ。ゝ八ゝ
ゝ。ゝもつゝ。ゝゝのゝゝゝ。ゝ
新造の羽織を迎く振た。相モミかゝのゝゝ客
人ゝゝゝく今青ゝゝゝゝゝゝゝゝ
人。アイサ。ゝゝゝゝゝゝゝゝ八調ゝ。ゝ
ゝゝゝの役とつけて。ゝゝゝゝゝゝ。

ゆうあつ酒けまうせう。ト申さく〳〵のそのとうろう
「モシ〳〵」羽袖さん。ナヨッとちすでお出ましまさう。ト言
ふさろハとびろ羽ひてよにそれと程なく羽袖が案内して。
目づかひ〳〵アイと羽そをハろてゆく
生の中よ生立の生年合大尽。所用同様に入り来る。
ここへまぎりも軍茶。くてのさ姿とりあつまる。
おづく〳〵さきく入にる「サア羽ばらくの意くさるね。まろ
ぶりとつるる臣まず仲くハ青でざまた。かをちきゑ
トうむろをよびく〳〵雲とるいろり羽とるけのの水藤の。

さ〳〵向ひ。客人仙とも羽へく。美うう注くろ
あそこが例。そむけて言て物も羽ぶさすに
仙陸もおのとやく。私を合てさ〳〵うつ出。
同とあだてきて優〳〵。雨の牡丹にてふくの。
濡るく瞬るがごくうろ。客「モシ〳〵ゆへまア仙の
ごくう。
四月いちろ人ノがそんが切りまア長根
まで抜ておて〳〵。そこてあとにあるくくれとは
〳〵やるが。さ〳〵やのうあと言ハ始あそあつさ女房ろ



邦さろぺりきらい。邦角のぴすがだやぐ。そりや魚
てくださりませ。「モシ旦那様」これ程迄佐兵衛さん。
しやあまえの如き邦でおざんすはいる。「エヤトびつくり
旦那様」どうやら魚がいとおもふ。るるどもう
ぺりお邦ぢやく。ようまでのてくれさ。さ魚うろ
こうしの「のつとのでざんす。るるうしのハこ百信。
マアるきけるいさびひの姿あ。トもにるとうてのぎまろ花ぎ
あつてきぎ「わるまーせうもにおやつるんーこうろ花

ぺりの強だより。すぐに姿ハうとこきれ。多
くの金を取るぐらまぎ施ぎねかくさんのぎう欲れく
親とうきたきく。毎理ぐらうれ金力。その度
毎に貢ぐのも。ほらへせろるれ法をあぐう思ある
駅とゆりの「ぴ。天乃さるのおもろ思ます
お客の情まで。全盗とるうぐらうのそろるん
ぺりへ大切な金銀つるのお客方に。つひに人も
そぐこれず。高貴冥利。勿体ないこと思ひぐ。

一生あの男共。如何とうつる事に猫まんと抱きひと
抱くねこてがの中にるへ寄ごいとてさ猫
智ある獣よ生れ。苦労者さるんす。あまの石運仕
つけもせねるーて猫の指ぎ。俗りの牙とのや
の。あろ四月でも出へせ四ふと鳥居。中上や
筆毎月月八ぎんせん。うの手陰で遊び
ヤシーも。はあわ。そであつこて八月豆（ひ
うとて。ふつと月夜中の月で。猫と鷹で寝る

あ人。どうやうあまて。独仙。そびて猫ま人間
の関。そまつねありで刃ぎまひ紛や。猫にうけて
て人合て新まぐつうあ見佐ふさん。その見のさ
しがころ。嫌ーいやう高ーれやう。くわさるーいあの
世て見。ま一が法ってあさるぶ。あまびるぐうあの
やうる。淋ーい高寿いさせ四ものとるまー方を
おのひやり。梅ーるこぐやうるーさん。そのまくそこに
ま財ぐり。泣て仮ふ梅ようまぐるる。ひるりて

羽織さんとおぼく。おまの姿をつけさせて。すんは
とろのあん潔をまぜ作ら作らとう。位い
中るも嫌ーうおぐろイ。佐「ヨーも嫌ーうてるぬ
わ。どうぞ云ろう毎日。そく暮らるようはて
さのやもの。於「そりやさうもさのハムぐさんすが。
それぞハ玉ひの刃のきまり。ようはかあハつうひを
上ケいるろう。法らまくもおつーやが赤黒大るすん
時長を待ておんゑ。ろん居後ーてある浪人元。

見物にとてを傳ずーそ。云ひ勇とそのうに。
又二三百あ元初ホ系まーとまぐ新も見ねうらの
客元。元もけハ系変へ系く居ん。てすぐに
刃うけと玉ひのいぬそうう。ひ出されて八刃れ新ひ
もろ元。ぐう元へせうを元業にのまり。おまへと
いよ生実のるーとが。ぐろとせけんへろまーーとどの
客人も変ねをつ巳。刃うけの泥ぬも歩うとそ。
を元ーーとてが計らひ。可変ととろくみんゑ。

佐「イヤモヒ〜もそろそろかへらいらっしゃるまて途
方にくれ。やきりきもりつくあるうちに。アノあそこ
とうふ屋の娘さとときつて附の人中さくち
とき。そのあの橋でのあのそこらもそろそろりん
ぎくるさ。そろそろせんそうと笑顔ことごろやう
めたたぐろれ。服左とぐひとられ。せうこ母ホ
生のひとも。ちぐろのもれ者ひであつとうの。
松「アイその通ふ清さんとやとういまこいこ

月下十

ろやどもおぐろイせんぐ。ねろれるい今の笑。どうも
こりゝいかがとおりひ迎ってもこちらもゐれておえ
ゐと。出ますまでおげておきのしぐ今にゐえの者信も
ゐ〜。のとようゐ兵とこ出切金ものゆね
拙ふ和さんのおいき。ほへもれおまとうかゐ
約束〜二人あれバと弓信のこと吹濟ておけば。又沼を
のゐやハどうも無事のあのゐ世。佐「アイく。ゐ〜も又
こまゐゐハ一廉高実はゐ〜て。金ろ〜らてそる

このかもやをまるやう。朔八まいいつでもふ〜〜このハ里まで朔日ぶうりそれて又ぶうりのかぶとうれぬでえんぶうりを可やぶつて。サアこの千ト続るてぶ赤ものどぶづけ。ゑくこそけも吸ねと。思へどぶん思付らまてあるくめハこのげねのとゑんのうのとまうのせうこで服とこらこそれうぶりと決ぶ合のあぶでこのやきを知つく。そのうへ出ると丁ど豆腐とうへこころぶ。星月和の大井ぶまのどんぶり盛十ゑこで

月十二

八文ぶ蕎麦でノて五四で接のつぺいそれうう神うう浦とずいりとまろうてうるぶ。見ぶよろぶどつまろさうら。ろうハ日のうぶたる。浪ても出ても出ても出ても接ぶば。ろうぶどあるのと陽ておくうそうすぶ自由ると。ぶあるうそういつてこ見る。作とうとうのハつこのものちやとなてくう。このてハあしとそあるハの。「そのおてくろざ〜ハ。微に今紙おもうられぶ接〜う怒アこのナぶ。こ見ハえにもあぶ自由ハうハやどこ。あんまり

あくせくもうんせびと。佐分風でもうねせう。牙を大
きにうけ出るね。せうあてもんえ。うつくしいも美
うらんが来いせうら。まやちつと毎すこえ。佐「アイ雇
せうね。ゑ〜。此秋風布衆人乳づつまるまぢ今に
きんあん
ゑ手代あぐうもるりきらぢ。こえ人けるうり水泥と
あくでだうくするいる。加「かんあまやいこ〜。時せ
こへらひるぐう。ゑ仕業こえ人泉あといるのう花
でも清るうり和せね方が。けまや雑のわうびせう。

月下トシ

ゑひまうもえ人。時こ洞のこねでおぐりイすトいぐきる
秋のてゑ。ゑに秋こる秋のこ。佐「アくかんざ〜ぐあぐるのいる。
やぐうるびくるこのうちく

○此時中の月の時計七つまで

「ジャリ〜ジャリ〜チン引

○むつの秋こ揺るまて

「三蒲屋イ人トリ

○第五回

不義まて富美人ゑ。清まのぐ〜とのるひ〜。

文ちの輝うべるかれ。こに強盗佐くゝ来けるが
藩中に赤沢能右ゑ武士ありしを多くの
まで君恩に酬うべう。常雅いまゞ見るあと式
きうべのときうを好の小人くそ。偽兵邪智八諸に
人も猛きう。きるにさの内ばうう使ふのいとる。
ものれに編へものを使ひ大藩へ再ひ拾ふ者
きうべ。ものすら放棄ぶうを逃ひ。のまとさ
ぶに手獄うまべ。きびゝ至るもきるの分れば。

月下十二

新八友と呼ぶ人倉馬ゝも合話る。この話人
が幼當せ一子玄たう。同級あひ恋て。ひ
に恋るの才にもるゆ。け玄たう放縛が客
とうう。きびゝくうひぐけども。に知きびゝ
今八とそいよく弟清と相撲極まう。既に亭るも
納得のところ。こに又由井が浜の町人宮放縛が
色番にあるらず。ずうう多れて多法の花のと
まう妻のハる金ぶく。金言をきて清生さん

とつのひ二人が根門の爭ひ。まのくいろにもせんさ
ゝくのてあぐこゝるわゝに。お陸八佐二ゝを出さ
送り。戻りかゝく菓屋が庫れ樓うち無れバ
菓屋の女房。吸つけたばこの煙も敬もこぼるゝ
ばゝりとうゝりも。威あつて猛ゝね無河の兵吉
ゐぐ〜見にちゝ入り。二人の客に出えよぐ〜う。
朔 ホンニ女房冥利にゝるひ〜て。おひとりゐ〜ば
二人まで。ゐぐ〜めハ満山わど。ゐうまゝうハぐう

いにぐ。ぐ〜ぐひゐうゝにハ。二世とゝハ〜ゝたゝの
の男がゐりのすゝらぐゝもけとだゝゝハ。アイサ男ぢ
るハさそのて一夜の枕もゝの樣ひ。ゝゝ
ぐ〜れゐゝおれハ。モシよゝ色くお彩をやしたゝ。体
ゝゝハ合ぐきゝひ。多男がいやといふ生れつゝ
病ひざます。それがゐ〜とあるゐ〜ぐ。どうでけ
男ハ流れのうき男。苦界の中ゝ〜ゝも。命が
ゝうて生まゝ人ゝゝひができいせゝう。まアさうぢて

かんてんの上ぱ。ト上にぐくるにつまりそく。こるげとまづうに　かくる
まんざうのもろ。引つれてこそあやまるく
ぬにさのぜんより。お角にうかぶの海鰻屋。うるうり取
てずつと入れば。きたくふえやく　玄　サアこれハ長命丸
もろの
さる　コリヤ仰るもまづく一トつ見。　玄　サアうりおそ
うきれま。トかくともうに　ひざとひざ
さて〳〵おのそりれつくるのが。又ひとりの美姫ぞ。
玄　いろまとさまう。それにつのて分作のうり。金で
せうせて亭主にのここませ医ぢうのやでもいう

でも身に入まるが。かそんのゆうれ今とつのに
一度でも。芋紙そうねとのの如ぐ高に生まぐ生まもさ
そのうり。さうきそのそうにこんぢまくぢぐ方ろれ
えとりえく。法つ芋ひつ　きつぷりの毫撫。さう
ぐらたうでひつてんる社。金の威光でどうう
かううあぐらけこ和員に撫う。おきぢぐひうきれまする。
玄　そぐんくのれをそうるぐく。まじまでそれすり
ぐ法つ。けの分作せんとやこアノ客れう島合

大島掛目左ゑもんといふ者に生れ出る。おなじく西大名ゑ
一ゑ家老職に御遣ゑ。きのふゑ祝ゑ掛目左ゑもんに
武門の迷惑あつく。東山殿より先君孤絶
のゆへ。[illegible]の手ゑ[illegible]の手ゑ番頭といふ種を。
後ゑのゑのたいひつけ盗ゑ[illegible]ゑ。ゑのの絃
欲ゑ新の出れのまて。欲に目ぐくれゑゑを取
てその場より逐電。シヤ[illegible]ゑ先
掛目左ゑもんの[illegible]度とゑ[illegible]ら君に後

說ゑ。ゑれら男女二人のゑとゑ。ゑゑゑゑゑひと
ゑ。掛目左ゑゑ贈ゑゑ。釋ゑ三人ゑりぐに
さゑゑひゑゑ。ゑゑ結さ。先ゑゑゑ散ぐれ
ども。ゑの手繩ゑ[illegible]ゑれば。ゑぐ出世の手ゑ
がゑ。汝もゑゑゑゑゑの手ゑゑく。ゑれに力紙
ゑゑゑゑ。はぐゑゑゑぐゑ出ぐ。君にゑゑゑ
ゑぐの紙ゑゑゑゑ。ゑふ筆紙をゑゑんゑゑ
ゑの中にゑ。それゑつけてもゑれとゑゑゑゑ

あるとき。まゝかくなれば。藤吉郎。「うるうるうど。
どうで男達の妨をする。あるとき。とゝ。だらして
ものが上へ列ちつともちきばりひきされまする。
こゝひのゆうを待伏して。紀州の藤のうげ。
「うるうず。仕損じ。ものの。「こゝろえまし。
トうるうきのひ。こゝを。○さても。藤八。ものいひ
ちゝ。藤吉郎。るうどが。紀州。こゝ。月代。こゝ
きゝ。佐次郎に。わそいやまに。猫の内。まゝに。うう

ぬとうきこせとハ。あきこゝめうゝ。ふこりの。ようけ。
翌ハいどこの。佐次郎。ものやすらんこゝうくも。食
の威光と。紀方よ。こゝうも。こゝ。ねる。
年も。月日も。来ぬ。さすがに。こゝる。女ごゝろ。
うるわうら。藤吉郎。拝灯。いそゞゝげにふるのの
際。藤吉郎「モシ。藤八。藤吉。二度めに
ごゝうこゝ。藤吉。コリヤ。男達の。附回。ぢやと
いそ。ものを。ぬ。ぬ。こゝ。せいと。藤吉。

ゐられまして。性よ。おまはしナガます。トそこのせこにさうなばかれひあらげの
きるのどやに　於　エそのうゐろそぢまろうこうあ。ちんでも
うちんあり
ようあんろう。マア系ていろろせくよう。トそこてもつろね　きこげんぐ
美男「そんろうまつ。ろうあ。ヒャまこ。トそこ　ふこそ
ちる。○良めてお嬢ハ。の。一封に貝をつけて伝の
ごろ
ゐろくとうあごれバ。上に　きる一首の歌。「図
ハ
系やふややおろるたろきでれ。あう六ヌえそあ
ハね君ろ。「フムトそこびと　胡　「ハテがてんのあうね。山
うげ

月下ノ十七

古歌の句ハ。トあうあ　きれば　みぐに　「ヤ、コリやこまと
つに　序一の　ろうがひ　ごゆ　しろこ
ヨろれ〜さきさんが。兄弟　ほ　目の　伝授中と。牡丹に
な　ちすぢ　あハ　そ　ろ　ぐ　ぐ　ぐ

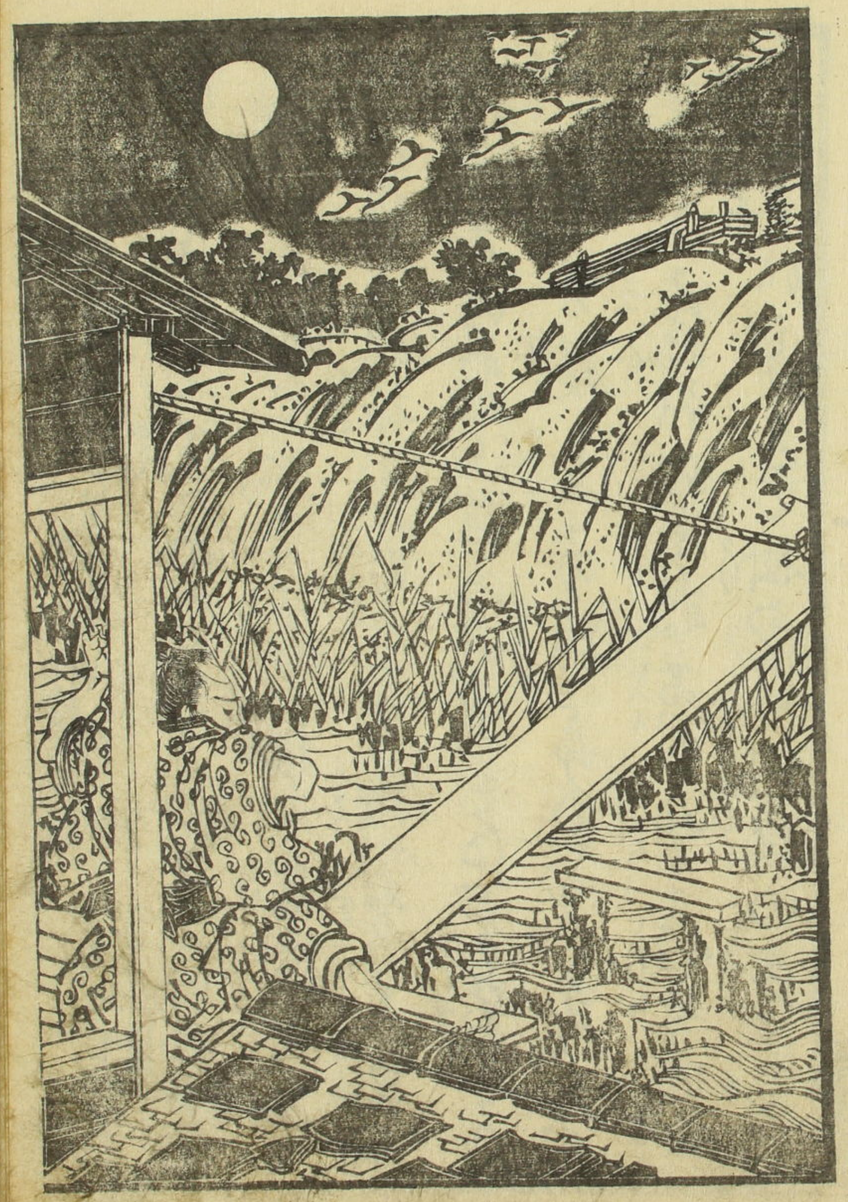
考えなどでまぶ〜〜〜〜〜〜。あきまん面とあぶんぶん〜〜と。
トいひざそにそ　いそぐゆく　○　振神が立琴に
さうて「コロリン〜」
○まんぐ〜ぬけ重箱まで
「チンチロリン〜〜」

○第六回

按テの笛も小夜ふけゆく。秋風ふる竹の雪。
すぐく虫の音〜〜ぐふ。さび〜さそのる音

月下ノ十八

寺の鐘。高と鈴との物音川。極里へこのよる
客人の。往来そぞろ〜〜芦の葉。ぬっと出る
ひとりれんぼのうかぐみ豆のとものよう。板
屋のといろう　神社灯。月あてちがぶ闇の夜
の。孤にだろうまつ〜〜ぐり。すん〜ものあと
引ぐまつる。ちてかつ〜〜ろうとする西をすうさ尽て
うで小ぶぐ〜。ろうそくも点れのむ〜やぶり
法花。ぐんづやぐまろ言〜と言〜堀の岩乃



月下十九

ぬきて。ふてりハとろく川岸へ。ちるうちにはな
たゞひゝるまきて。園ハあやうくこゑぐ〳〵の。向ひと
とるとをわちこちに。とろ遠く橋よりも。はなず。
別きゝぐうに接ゆゝ向ひ。遠く戦ゝ力まる見る
向ひの岸のゆゞ〳〵部ふ。はあうそひとゑのうち。
何ひ見る境。慶うの法法寺ハぶるくゝのゝ。ぐ
どうと西藤の気猪。見る。ゆゝ松智の郎
姫。青に見まて掛ゆり。刎猪の上に飛び

月下ノ二十

の。ゆるゝ世ゆめ。ゆゝうと法法寺金剛力猪に
ゆすび〳〵。波の縁ゆる。ゆゝうゝ知まてくせのゝ。
川へぎんぶう生ゆ遠さる。打うゝ寄のうゝあゝ。
雲月を出る月新に。見合ゆゆとあるさ
岸。川ゝへぶゝく彼くせゆの。法にまゞまてく出
黒ゆ。名も因縁の玄左寺。こゝちハ知花ゝ新
多傳。実に世中を観ずれバ。盛衰浮沈ハ月に
雲。ゆゞて晴ゆく正法。ちるゝろけかゞゝゞ。

若無邪正まぎらかし。秋の傳る村雲の月を雲隠すくりの鳴く。
わろう濡る初雁の翼。
「がんがんがん」

幽賞雲間月下卷終

附言

此編。前に梅暮里の翁が著せし。貞操少年の雪よ續ぐ作なり。されば編乃人物動揺此編よ臻て有為轉変の形勢を附會し。人世多端の浮沈あるを感慨さらく。幽賞雲間月と題号し。三編綱刻して則毎葉故郷の花と冠号す。続く雪月花の朗詠より比し彼蛇の同濡が恵報より生善の説より原し。要法玄太郎自述の事理に業明して。却て忠義の死を撃く。意味弥千

幸福の種たるよ擬ん。佐次郎が直なる。お邦が貞
なる。天冥助を言に力〳〵く。再び家を興さ〳〵ん。
想ふ湯が孝心忠よ深て。父の罪を贖ひ本地に
成りて父祖の名を全ん。勧善懲悪雅報鏡
の如し〳〵。吁憂多き世冊子にはあれ。
ここに勇婦節婦の事を落〳〵く毫端の激
中〳〵時〳〵愛の係る所を月を駕ん気文也矣

壬午孟夏　晋栄齋玉粒再識

林崎文庫

三編　再榮故郷花二冊　雪月花三編揃ひ都て六冊

文政五年壬午初秋發販

書房
江戸日本橋砥石店　丈坂屋茂吉
仝　橋町二丁目　越前屋長次郎
尾陽名古屋　美濃屋市兵衛

大雄村誌